

# 宗教集団における支配と暴力

——オウム真理教を中心として——

沼 田 健 哉

## 一 はじめに

湾岸戦争ならびにオウム真理教事件は、国家や宗教集団による暴力が顕在化した事件であった。宗教は、権力に正当性の根拠を与える事をその主要な機能の一つとしてきた。

集団が継続するためには、権力と支配の両方の要素が必要であるが、その形態は、時代的変遷をとげてきた<sup>1)</sup>。権力と支配の錯綜した関係には、宗教が関与してきたのである。以下、オウム真理教を主たる素材としつつ、宗教が、戦争を含む暴力の行使にいかに関わっているかを分析の対象とする。まず、カリスマとリーダーシップ、カルトの概念、神秘体験等について言及する。ついで、支配と戦争について、さらに、諸宗教における、寛容性と排他性を暴力の正当化との関連で考察する。その後、オウム真理教を対象として、分析を加え、最後に全体的考察を行なう。

## 二 カルト、カリスマとリーダーシップ、神秘主義

オウム真理教は、新新宗教の一つとして研究の対象とされている。多くの

1) Max Weber, Soziologische Grundbegriffe (Grundriß der Sozialökonomik, III. Abteilung, Wirtschaft und Gesellschaft, Verlag von J.C.B. Mohr [Paul Siebeck], Tübingen, 1921-22, Erster Teil, Kap.1, S.1-30.) マックス・ヴェーバー, 阿閉吉男・内藤莞爾訳『社会学の基礎概念』恒星社厚生閣, 1987年。権力と支配に関しては、マックス・ヴェーバーがきわめて体系的な考察をしている。

新宗教、ならびに新新宗教が日本に現存しているが、オウム真理教は、日本において初めて成立した本格的なカルトとも見されている。

カルトの定義の一つとして、あらゆる宗教の始原であり、一人のカリスマ的リーダーとその信者によって形成される、小規模な<sup>バンド</sup>集団のほかにはほとんど構造をもたず、経典もないという定義がある。その際、カルトは、次の二つの理由により非調和的と見されている。

(1)カルトは、新しい宗教伝統を急進的に始めようと奮闘する。(2)カルトは、それが腐敗した社会と見すものと緊張、対立関係にある。そのため、カルトの大部分は短命であり、成長し、生き残る可能性は、きわめて少ない<sup>2)</sup>。

以上の定義は、カルトの一部に対しては適合的であるが、包括的なものとは見しにくい。

これに対して、スティーヴン・ハッサンは、主として統一教会を素材として、以下のような定義をしている。カルトは、歴史の中で一貫してみられる、あらゆる種類のカリスマ的リーダーのまわりに生まれる熱狂者の集団と一般的には定義できるが、現在のものに限定すると、非宗教的なものをも内包することができる。宗教カルト以外にも、政治カルト、心理療法または教育カルト、商業カルト等があげられるというのである。しかし、このように、カルトという概念を無限定に使用することは、混乱をもたらす可能性がある<sup>3)</sup>。

そのため、ハッサンは、カルトの外に、破壊的カルト (destructive cult) という用語を用い、表向きの目的がなんであろうと、その目的追及のためにあからさまな欺瞞を行なうグループを指すとしている。そして、カルト信徒にとって共通する主題の項目を列記している。

さらに、破壊的カルトには、独特の性格があるとして、それを鑑定するた

2) David Bromley & Anson Shupe Jr., *Strange Gods* (Goro Inasawa 1986), 稲沢五郎訳『アメリカ「新宗教」事情』ジャブラン出版, 1986年。当書以外にも、カルトに関する言及や定義は多くの研究者によってなされている。

3) Steven Hassan, *Combating CULTS MIND CONTROL*, (Park Street Press 1988) 浅見定雄訳『マインド・コントロールの恐怖』恒友出版, 1993年。

めの基本的な分野として、リーダーシップと教義とメンバーシップの三つをあげている。リーダーシップに関しては、指導者の経歴、権力の集中と操作の形態、教義に関しては、内部者向けと外部者向けの教義の相違の有無、メンバーシップに関しては、勧誘、グループの維持、辞める理由という三つをあげている。

これらの項目は、羅列的であり体系的であるとはいえないが、一教団での豊富な体験があるために説得力を有している。以上のようなハッサンの研究に比較するならば、マーガレット・シンガーは、多くの事例からカルトに関する一般化を試みており、その言語は、以下の三つの要素を表わすとする<sup>4)</sup>。

(1)グループの起源と指導者の役割。(2)権力構造。すなわち指導者(たち)と信者との関係。(3)巧みに組み合わされた説得法(マインド・コントロールとか、もっと一般的に洗脳とも呼ばれる方法)を利用する事。

シンガーは、カルトには、新しい信者や会員を集める事と、資金稼ぎという二つの目的があり、そのアメリカにおける主要なタイプとして、以下のようなものをあげている。(1)新興キリスト教派(2)ヒンドゥーなどの東洋宗教(3)オカルト、魔術、悪魔主義(4)心霊術(5)禅などの中国、日本の神秘哲学(6)人種関係(7)空飛ぶ円盤を始めとする外宇宙現象(8)心理学ないしは心理療法(9)政治(10)自助、修養、ライフスタイル系統。

その内容を見ると、やはり宗教以外の項目も含まれている。正當的キリスト教以外の多くの宗教は、カルトとラベリングされる可能性があるといえよう。シンガーは、カルトの歴史を考察し、十九世紀のアメリカで起った宗教変動時のカルト派は、キリスト教に代わる独自の信仰と世界観を提示し、アメリカにおける宗教の範囲を拡大したとする。

これに対して、1960年代に対抗文化運動の中で発生したカルトは、心霊的

---

4) MARGARET THALER SINGER, CULTS IN OUR MIDST, Jossey-Bass Inc., 1955, マーガレット・シンガー, 中村保男訳『カルト』飛鳥新社, 1995年。当書は、カルトに関する著書の中でも最も優れたものの一つといえることができる。

なもの、東洋的なものへの顕著な志向があり、自己超越、悟り、世界平和、社会変革等の要素が含まれていた。さらに、1970年代には、新キリスト教的で政治的であり、かつ、心理学的要素をも含むカルトが台頭した。1980年代には、心理学カルト、オカルト・カルト、富裕カルトと類型づけられるものの勢力が急激に拡大した。

以上のように、カルトの時代区分が明確になされている事が、シンガーのカルト論の特色であり、若干カルト概念の整合性において問題はあるが、過度の一般化の傾向は少ない。

ところで、シンガーは、カルトがもたらす問題点として、以下の項目をあげている。(1)無数の個人や家族に相当な被害を及ぼしている。(2)最新式の複雑な心理的、社会的な説得術を使って信者を集め、脱会を防ごうとしている。(3)持っている資金により、公正な批判や論評を抑えるために、訴訟を起こすと嚇すなどの脅迫的な行動に出ている。(4)さまざまな隠れ蓑をつけて社会の中に侵入しつつある独裁主義で、一般市民の自由を脅かす。

シンガーは、それ以外にも、カルトが、公衆衛生問題の視角から市民の生活へ悪影響を及ぼす具体例として八つの項目をあげている。それらは、破壊的カルトに対して、反カルト評論家のマーシャ・ルーディンがあげている以下の項目と共通する部分がある。

(1)教祖をメシアと信じ絶対服従。(2)合理的思考の禁止。(3)信者のリクルート手段が欺瞞的。(4)信者にカルトへの依存心を高めさせて彼らの問題解決を幫助。(5)信者の罪意識を操作。(6)教祖が信者の経歴や重大な決断の全てを代行。(7)社会向上に貢献という偽の目的、実はカルトの物質的な存続だけに固執。(8)信者は、フルタイムで教団に無料奉仕。(9)信者を外界から遮断、現実感覚を破壊。(10)反女性、反子供、反家族。(11)世界終末を信じ、自分らだけのサバイバルを確信。(12)「目的は手段を選ばず」を実行。(13)財政状態を秘匿。(14)暴力の気配がつきもの。

カルトの否定的な項目は、破壊的カルトの項目とほぼ重複するが、このよ

うに、アメリカの宗教に対しては、有効な分析概念であるとしても、日本の宗教に対して用いる場合には、また異なる状況下にあるといえよう。井上らは、日本には、新宗教という中立的な用語がある故に、カルトという言葉は、学術用語としては、用いない方がよいと主張している。

その理由は、カルトという言葉には、その運動に対する嫌悪感が根底にあるため、カルトとラベリングすることにより、それ以上の冷静な分析ができにくくなる事、さらには、カルトの特徴とされるものも、それ以外の宗教運動にも見出される項目が少なからずある事をあげている<sup>5)</sup>。

いずれの分析概念も、その成立した文化的背景に拘束されている。そして、日本で発生した宗教集団と、アメリカで発生した宗教集団の間に、多くの差異がある蓋然性はきわめて高い。さらに、いずれの宗教も、何らかの非寛容性と排他性を有しているが故に、キリスト教が支配的な欧米の国家においては、キリスト教以外の宗教集団に対して、ある程度の偏見がみられるのは、当然といえる。そのために、分析概念に一定の文化的バイアスが生じがちである。

しかし、分析概念は、基本的には、分析のために有効であるか否かが最も重要なポイントなので、いかなる用語を用いる場合にも明確に定義することが重要といえよう。さらに、カルトという言葉を用いる場合でも、新たに明確な定義をするならば問題は少なくなる。しかし、バイアスのある用語を避けて、新宗教という用語を用いる事も、一定の有効性を持っているといえる。

越智道雄は、カルトと新宗教とセクトという用語を用いつつ、以下のような定義を試みている。すなわち、カルトとは、「新宗教運動で生まれてきたラディカルな修行方法を持つ小規模教団<sup>6)</sup>」であり、セクトと比較するとキリス

5) 井上順孝・武田道生・北畠清泰編著『オウム真理教とは何か』朝日新聞社、1995年。

6) 越智道雄『〈終末思想〉はなぜ生まれてくるのか』大和書房1995年、155頁。

ト教に限定した場合、より新しく、教祖が活躍中で、そのカリスマが隆盛期にある、不安定な小規模教団であり、世間への開放度も低いものを指すとする。オウム真理教は、キリスト教系とは見しにくいので、越智のセクトに関する言及は、度外視すべきであるが、カルトが興隆してきた時代的背景についての多くの考察には参照すべきものがある。ところで、新宗教、ならびに新新宗教については、すでに多くの論議がなされている。しかし、前記のごとく分析概念は、分析に有効であるか否かが、最大のポイントであるため、一部でみられるような、論議は必ずしも生産的とは見しにくいといえよう<sup>7)</sup>。

オウム真理教を、カルト、破壊的カルト、新宗教、新新宗教のいずれに分類するかは、さして重要な問題ではなく、概念構成が緻密であり、その論述に論理の一貫性があるか否かが、問われるべき事項といえることができる。

以下、一応新新宗教の一例としてオウム真理教を分析する。ところで、マックス・ヴェーバーの社会科学の概念の中でも、カリスマは、きわめて当教団の研究において重要な概念である。ヴェーバーは、カリスマに関して、以下のように述べている。『『カリスマ』Charisma という表現は、ある個人のもつ非日常的 *außeralltäglich* な資質(それを現実にもっていようと、もっていると自称しているのであろうと、あるいは、もっていると誤り考えられているのであろうと、いずれでもよい)を意味する。したがって、『カリスマ的権威』*charismatische Autorität* とは、被支配者が特定の個人 *Person* のそう

7) 井上順孝の新新宗教に関する考察は、論述の抽象度に差異があるため、生産的でないとの印象を与えがちである。現時点においては、新新宗教に関しては定義より実証的研究の方がより重要な段階にあるといえよう。

8) Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, 3 Bde., 1920-21, マックス・ヴェーバー, 大塚久雄・生松敬三訳『宗教社会学論選』みすず書房1981年, 86頁。

なお、カリスマに関しては、S.N.EISENSTADT ed. *Max Weber ON CHARISMA AND INSTITUTION BUILDING*, THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS, 1968. 参照のこと。なお、沼田健哉『宗教と科学のネオパラダイム』創元社, 1996年, 中牧弘允編『神々の相克—文化接触と土着主義—』新泉社, 1982年も参照に価する。

した資質への信仰からしてみずから進んで服従するような、そういう仕方で行われるところの人間に対する支配（外面的な性質がつよかろうと、あるいは、内面的な性質がつよかろうと）のことなのである<sup>9)</sup>。」

以上の論述は、一般に、麻原のカリスマ性が外部の人間がオウム真理教へ参入する契機の一つとなっていたと見されている事と、弟子や信徒も、一定のカリスマ的資質の獲得を目指したが故により重要である。さらに、オウム真理教は、一種の疑似国家を形成し、かつその教団組織を用いて、反社会的行動を行なったため、その組織におけるカリスマの布置が注目されてきた。

この問題に関連し、アミタイ・エチオーニは、組織におけるカリスマの分布に関して以下のような考察を行なっている。すなわち、まず、ヴェーバーとパーソンズが指摘しているように、すべての規範的権力は、根源的には、カリスマから生じるものなのである。さらに、種々の組織内の地位の間ではカリスマの不均等な分布が存在する。

エチオーニは、カリスマを、「ある行為者が他の行為者の規範的な志向にたいして、全般的な強烈な影響をあたえうる能力<sup>9)</sup>」と定義する。ついで、ヴェーバーは、純粋なものと日常化されたものにカリスマを区分しているが、カリスマ的指導者が、自分の権力に服従する者に対してもっている影響力の強度は、純粋なカリスマにおいて高く、日常化されたカリスマにおいて低い。オウム真理教においては、純粋なカリスマと、日常化されたカリスマの一類型である官職カリスマの布置関係が重要な研究課題としてあげられる。さらに、カリスマは、最上部のみではなく、組織内の多様な位置で、種々の形態において、要求されもするし発顕もする。

ついで、エチオーニは、組織のエリートと下級参加者との間の相互作用に関して、重要な性質を指摘する。すなわち、「エリートが従属者にたいしても

9) Amitai Etzioni, A Comparative Analysis of Complex Organizations—On Power, Involvement, and Their Correlates, New York: The Free Press of Glencoe, 1961. A, エチオーニ, 綿貫譲治監訳『組織の社会学的分析』培風館, 1966年, 147頁。当書のこの部分は、きわめて重要な指摘であり示唆に富むといえよう。

っている統制が継続的で緻密であればあるほど、エリートが従属者にたいしてカリスマ的権力をもつことは少なくなる、また統制が断続的で疎遠あるいは緩慢であればあるほど、それだけカリスマが発展し維持されることが多くなる」<sup>10)</sup>。

この指摘は、エチオーニのカリスマ概念の解釈から生じており、ヴェーバーの理論から必然的に帰結するものとは見しにくい。個人的カリスマは、組織上の地位からも生じるし、既存の組織構造と両立しないものではないという見解は示唆に富む。エチオーニは、カリスマ概念を機能主義の立場から、機能的、逆機能的という両面に注目しつつ再構成している。

ところで、ヴェーバーは、「救済財なるものはなによりもまず、独自の宗教的（ないし呪術的）行為とか、あるいは方法的な禁欲または瞑想が直接に引き起こすところの状態、つまり、そうした感情的な心的状態そのもの<sup>11)</sup>」であると述べている。この部分は、オウム真理教においては、種々の神秘体験が重要な意義をもつとされているため、より重要な意味をもっている。

しかし、瞑想による神性との合一は、だれもが高度のレベルに到達しうるものではなく、宗教の歴史においては、つねに、「人間の宗教的資質 religiöse Qualifikation の不平等性という重要な経験的事実がみられる……すべての強烈な宗教意識にあっては、カリスマ的資質の差別に応じて一種の身分的な分化を生みだす傾向が生じてくることになった<sup>12)</sup>」のである。

ついで、ヴェーバー以外の神秘主義の研究としては、ウィリアム・ジェイムズの研究が古典的なものとして、現在にいたるまでその存在価値を有している<sup>13)</sup>。ジェイムズは、「意識の神秘状態」に関して、以下の四つの標識をそなえた経験を、神秘的と命名している。(1)言い表わしようがないというこ

10) 『同書』155頁。

11) マックス・ヴェーバー、大塚久雄・生松敬三訳『前掲書』55頁。救済宗教に関しては、島蘭進『現代救済宗教論』青弓社、1992年を参照のこと。

12) 『同書』70頁。

13) William James, The Varieties of Religious Experience. A Study in Human

と。(2)認識的性質。(3)暫時性。(4)受動性。

その具体的な事例として、インドの神秘的な悟りの修練としての瑜伽を、個人と神性の合一の体験を指すものとして分析の対象としている。ジェイムズは、神秘的な意識の一般的特徴として、全体的に見て、汎神論的で楽観論的であり、別世界的な精神状態と、もっともよく調和すると述べている。

ついで、アンリ・セルーヤも、修行によって体得される神秘主義として、瑜伽を選択し、人間の自律的な解説を含む無神論的世界に親和的な神秘的な体系であるとしている<sup>14)</sup>。神秘主義とは、人間精神と実在の根元との内密な、直接的な結合であり、神性の直接的な把握を目標とするものであるという解釈を行なっている点、注目すべきものがある。ヒンドゥー神秘主義の最終目標は、感覚的認識や、思考の全対象から、自我を分離させることにあるという見解を提示している。

ついで、オウム真理教においても、種々の点で、支配の正当性という問題が論点といえよう。ところで、支配とは、ヴェーバーの定義によれば、「一定の命令に対して服従を見出すチャンス」とされており、支配者と被支配者との間においては、支配の正当性の根拠によって、内面的に支えられるのが常とされている。

この支配の正当性の根拠としては、前記のカリスマ的支配の外に、伝統的支配と合法的支配がある。オウム真理教は、一種の疑似国家であったので、

---

Nature, Being The Gifford Lectures On Natural Religion Delivered at Edinburgh in 1901-1902., Longmans, Green, and Co, Thirty-Second Impression 1920. W・ジェイムズ, 榊田啓三訳『宗教的経験の諸相上・下』岩波書店, 1970年。

当書は、宗教の心理学的研究において、宗教社会学における、マックス・ヴェーバーに匹敵するような高い評価と影響力を有している。

14) Henri Sérouya: LE MYSTICISME, Ire éd., Presses Universitaires de France. 1956, アンリ・セルーヤ, 深谷哲訳『神秘主義』白水社, 1989年。

なお神秘主義に関する文献としては、岸本英夫『宗教神秘主義—ヨーガの思想と心理—』大明堂, 1958年があげられる。

Don Cupitt, Mysticism after Modernity, Blackwell Publishers Inc., 1998.

疑似国家ならぬ真の国家である日本と戦争を企てるにいたったともいえるのである。そのため、支配の正当性を巡って、疑似国家と国家の間での裁判まで生じるに至ったという見方も可能である。

この問題に関連し、ヴェーバーは、以下のように述べている。「戦争は、ほかならぬ近代的な政治共同態の内部に、ある種のパトスないしは共同態感情を生みだし、それによって、戦士たちのうちに献身と無条件的な犠牲への共同感情を呼び起こすばかりでなく、さらに困窮した人びとへの憐憫から発し、しかも、原始的な諸団体のあらゆる障壁を突き破るような愛の働きをさえ、大量現象として出現させることになる。……さらにそれに加えて、戦争は戦士自身に、その具体的な意味づけとして独自の或るものを、つまり、死の意味とその聖化に関する戦士のみに固有な感情を賦与する<sup>15)</sup>。」

麻原は、「戦え！真理の戦士たち」を愛唱していたが、それも、麻原自身のニヒリズム的世界観の淵源となっている、ルサンチマンに基づくタナトスに発しているとも推測される<sup>16)</sup>。麻原は、仏陀やイエスを自称したが、経済的に正当な収入を得る道を閉ざされた者が破綻せざるを得なかったのは、以下のヴェーバーの論述によっても予測された事態であった。

「神秘論的な救いの追求はその意味するところからして当然に最強度の貴族主義、つまり宗教的救済における貴族主義とならざるをえない。……職業労働へと合理的に組織されているような文化のただ中では、無差別主義的な同胞関係を培い育てる余地など——経済的に不安のない社会層以外——ほとんど存在しない。合理的文化の技術的、社会的諸条件のもとでは、仏陀とか

15) マックス・ヴェーバー、大塚久雄・生松敬三訳『前掲書』120頁。なお、戦争に関しては Karl van Clausewitz, VOM KRIEGE 1832-34. クラウゼヴィッツ、篠田英雄訳『戦争論 上・中・下』岩波文庫 1968年が基本的文献としてあげられる。なお、現代において戦争に関する社会学的研究の中でも、アンソニー・ギデンズの研究は卓越しているものの一つといえよう。

16) 山之内靖『社会科学の現在』未来社、1986年。山之内靖『ニーチェとヴェーバー』未来社、1993年。このルサンチマンはニーチェに発し、ヴェーバーにより再検討され現在に至るまで社会科学の重要な分析概念として存続している。

イエスとか聖フランチェスカのような生き方は、外的な理由だけからしても、破綻するほかはありえないであろう。」<sup>17)</sup>

現在のように、経済の論理が貫徹している社会においては、カリスマの特性とされている、現世の中にありながら、現世を糧としないような生き方は、より困難となっている。

### 三 一神教と多神教における寛容性と排他性

オウム真理教は、シンクレティックな新新宗教の一つとして位置づけられている。この事項に関連し、岩井洋は、日本＝シンクレティズム、西洋＝キリスト教という暗黙の図式を問題として、キリスト教もシンクレティックな面があり、問題なのは、いかにシンクレティックであるのかということにあるとする<sup>18)</sup>。

岩井の論旨は、言うまでもなく正しいが、オウム真理教のシンクレティズムは、やはり他の教団とは差異があり、一神教と多神教の双方が有する排他性が相乗的に作用したという見解も、一部にはみうけられる。

従来、一神教は、排他的でありかつ好戦的であるという見解が多く、それに比較すれば多神教は寛容性に富み、平和的であると見されていた。しかし、歴史上において、仏教徒同士が戦闘を行なった例も数多くあり、最近では、スリランカで仏教徒を含む武力闘争が行なわれている<sup>19)</sup>。

宗教集団は、一定の価値体系を共有し、時として、対内道徳と対外道徳の二元性の単位となる可能性を有している。オウム真理教は、前記のごとく一

17) マックス・ヴェーバー、大塚久雄・生松敬三訳『前掲書』160頁。

この問題に関しては、マザー・テレサの存在がその現代的形態として一つの示唆を与えている。和田町子『マザー・テレサ』清水書院、西川潤・小林正典『マザー・テレサ インドから世界へ』大月書店、マザー・テレサ『生命あるすべてのものに』講談社現代新書等を参照のこと。

18) 宗教社会学研究会編『いま宗教をどうとらえるか』海鳴社、1992年、151～168頁。

19) 田辺繁治編著『実践宗教の人類学上座部仏教の世界』京都大学学術出版会、1993年。なお、この仏教集団に関しては、多くの言及がなされている。

神教と多神教の排他性と暴力の正当化の要素が複合的に関連し、かつ、組織による操作が関与したという考察も可能である。もし、教義によってのみ教団の行動が決定されるものであるならば、社会運動論を含む社会学的分析の必要性は無い<sup>20)</sup>。さらに、宗教のもつ排他性に関しても多元的な分析がなされなければならない。

なお、ヴェーバーは、国家を「自己の行政幹部が諸秩序の実施のために物理的強制の正当な独占 (Monopollegitimen) を効果的に要求するとき、かつその限りでの政治的アンシュタルト経営 (Anstaltsbetrieb)<sup>21)</sup>」と定義している。

さらに、政治団体や国家にとっては、暴力行使が本質的な要件といえるほど不可欠な手段と見されている。しかし、歴史の進展につれて、国家の形式的な特徴は行政秩序および法秩序となり、正当な暴力行使は、国家による是認や規定なしには行使できないようになってきている。

したがって、オウム真理教の場合は、基本的には、日本国内における国家による是認なしの暴力行使と見すべきであろう。しかし、国家や民族間の暴力行使は、古来から継続されてきており、聖書も、多くの戦争に関する記述で満ちている。

村田充八は、ピーター・キャンベル・クレイギの研究に依拠しつつ、戦争と聖書的平和に関する考察において、戦争と平和の問題が重要な理由を、以下のように指摘している<sup>22)</sup>。(1)戦争の問題は世界の平和にとって、最も身近な破壊的な暴力である故に克服すべき課題となっている。(2)構造的暴力

20) 塩原勉『組織と運動の理論』新曜社、1976年。

塩原勉『転換する日本社会—対抗的相補性の視角から』新曜社、1994年。

21) マックス・ヴェーバー、阿閉吉男・内藤莞爾訳『前掲書』84頁。

22) Peter C. Craigie, The Problem of War in the Old Testament (Wm, B. Eerdmans Publishing Co. 1978.), ピーター・C・クレイギ、村田充八訳『聖書と戦争—旧約聖書における戦争の問題—』すぐ書房、1990年。

村田充八『戦争と聖書的平和—現代社会とキリスト教倫理—』聖恵授産所出版部、1996年。

としての飢えや難民の問題は、環境問題と共に戦争によってもたらされる事が多い。(3)戦争の状況において、人間の生の意味を問うことを通して、殺戮を行なう人間の本質を解明する契機ともなりうる。(4)戦争は、平和と対比して考えることにより、平和を問題として考察する契機となる。

これらの項目の中でも、(2)は特に注目すべきもので、戦争を契機として多くの悲惨な状況がもたらされるに至っている。

村田は、キリスト者が、「平和の民」と自己規定しながらも、戦争を繰り返してきた要因を、「人間が自らを神の地位に引き上げ、自らの主張を絶対的なものと位置付けて、相手の人間を自らの思想の支配下に置こうとした傲慢さ<sup>23)</sup>」に求めている。宗教は、支配に正当性を付与すると共に、人々の行為や主張の正当化のための根拠をも与えてきた。

しかし、聖書の中には、多くの平和への呼びかけがあり、モーゼの十戒の中にも「殺してはならない」という殺人の禁止に関する事項が含まれている。この問題に関し、村田は、社会学的視点から、戦争を繰り返す要因の分析のためには、人間の思想の枠組みを形成する視座の重要性に関連して、準拠枠(frame of reference)の問題が重要であると述べている。

人間は、準拠枠によって、集団の規範を形成する。マートンも、「アメリカ兵」の調査において、準拠集団の理論によりながら分析しているが、これは、宗教集団の分析においても、重要な研究といえる。<sup>24)</sup>

村田は、人間が留保条件を付けて戦争を正当化する事に注目して、「正義の戦い」という考えについてのキリスト者の立場に関して言及している。まず、

23) 村田充八著『前掲書』55頁。

ニーチェの神の死と超人の概念を参照のこと。なお、ドストエフスキーの著書も参照に価する。文学と神の死に関しては、Charles I. Glicksberg, *Modern Literature and the Death of God*, The Hague/Martinus Nijhoff, 1966 があげられる。

24) Robert K. Merton, *SOCIAL THEORY AND SOCIAL STRUCTURE*, The Free Press, U.S.A, 1957. ロバート・K・マートン, 森東吾訳『社会理論と社会構造』みすず書房, 1968年。

アウグスティヌスは、プラトンの『国家』を継承しつつ発展させた、『神の国』において、国家と正義、平和のための戦争に関する論議を展開している<sup>25)</sup>。

このような正義の戦いに関しては、湾岸戦争において、ブッシュ大統領が、「ジャストウォー」の概念を提起したことが有名である。ブッシュは、戦争を行なう場合の原則を以下のように提示している。(1)正当な理由(2)合法的な権威の存在(3)比較上の正しさ(4)正しい意図(平和と和解のための戦争)(5)最後の手段(6)成功の可能性(7)予想される結果のソロバン勘定(8)正しい精神<sup>26)</sup>。

以上の項目をみると、それほど体系的とはいえず、宗教的理念が背景にあることは明白であるが、世論調査の結果によってのみ、その正当性を判断すべき内容とは異なっているといえよう。

なお、聖戦の概念は、他の宗教にもみられ、イスラム教も例外ではない<sup>27)</sup>。この事は、岸田秀が、「あらゆる戦争は宗教戦争である<sup>28)</sup>」と述べているのは、ある意味において正しいという事からも推測される。なぜなら、R・N・ベラーが述べているように、「宗教とは、人を彼の存在の究極的条件に関係づける象徴的な形態」であるからである<sup>29)</sup>。究極的な次元での対立は、大規模な対立を喚起しがちなものであり、時としては戦争にまで至ることがある。

ところで、現在日本国内のみならず、全世界で、宗教が関与した紛争や対立がより顕在化している。オウム真理教も、一種の宗教国家を形成しようと

25) J. Burnet, Platonis Opera vol. IV, Oxford Classical Texts, プラトン, 藤沢令夫訳『国家上・下』岩波文庫, 1976年。

S. Aureli Augustini Episcopi De Civitate Dei Libri XXII ex recensione. B. Dombart, quartum recognovit A. Kalb. Vol. I. Lib. I-XIII, Vol. II. Lib. XIV-XXII. Lipsiae in Aedibus B. G. Teubneri MCMXXVIII, MCMXXIX, アウグスティヌス, 服部英次郎訳『神の国全五巻』岩波文庫, 1982年。

26) 村田充八著『前掲書』85～86頁

27) 山内昌之編『「イスラム原理主義」とは何か』岩波書店, 1996年。

岡倉徹志『イスラム急進派』岩波新書, 1987年。

28) 岸田秀『ものぐさ精神分析』青土社, 1977年。

岸田秀『幻想の未来』河出書房新書, 1985年。

29) R. N. ベラー, 河合秀和訳『社会変革と宗教倫理』未来社, 1973年, 51頁。

したと想定するならば、宗教と国家の関係はきわめて重要な問題といえる。

ユルゲンスマイヤーは、西欧の国民国家は世俗的ナショナリズムによって形成されたが、現在、世俗的ナショナリズムと宗教的ナショナリズムとの対決とも解釈できる現象が、世界各地で発生している<sup>30)</sup>。

それらの紛争も、宗教的要因のみによって起こるのではなく、複数の要因が介在して生じているのはいうまでもないことである。しかし、まず宗教的要因、中でもその暴力に裁可を与える側面に限定して、以下考察を加えることにする。

ユルゲンスマイヤーは、宗教対立が暴力的となるケースが多いのはいかなる要因によるかという問題を、宗教的ナショナリズムに関連させて考察している。ほとんどの宗教が、何らかの暴力的な要素を含んでいるし、暴力のイメージが中心的な役割を担っている宗教も少なからずある。そのような、宗教的ナショナリズムの暴力性を分析するためには、宗教一般の暴力的な特質を解明する必要がある。

ルネ・ジラルドは、暴力的な宗教的シンボルと供犠の儀礼は、暴力的な衝動を引き起こす契機となると共に、その衝動を減少させる要素ともなっている。ジラルドは、儀礼化された暴力は、ある社会の一員が、そのコミュニティの成員に、自分の敵意の感情を解放することを許容することによって、グループの凝集性を高めるという機能を果たしているとする<sup>31)</sup>。

宗教の経典等においては、究極的な善と悪、聖なる真理と虚偽の遭遇は、一種の戦争と見られる場合が多い。宗教は、このようにして、神話、シンボル、儀礼などを通して死と無秩序をコスモス化する。暴力的なイメージは、

30) Mark Juergensmeyer, *The New Cold War? Religious Nationalism Confronts the Secular State.*, University of California Press, 1993.

M. K. ユルゲンスマイヤー、阿部美哉訳『ナショナリズムの世俗性と宗教性』玉川大学出版部、1995年。中野毅・飯田剛史・山中弘編『宗教とナショナリズム』世界思想社、1997年。太田雅男『宗教と民族』学習研究社、1996年。

31) René Girard, *La Violence et le sacré* (Éditions Bernard Grasset, Paris 1972). ルネ・ジラルド、古田幸男訳『暴力と聖なるもの』法政大学出版会、1982年。

宗教的に再解釈されることにより、恐怖が取り除かれ、正当化されかつ免責される。

現代の宗教における、戦争行為のレトリックは、依然として多く、武勇の比喩は、重要な構成要素である。しかし、宗教における調和と暴力のような不調和は、共にコスモスの戦闘に内包され、宗教はそれらを通して平和と秩序が暴力と混沌を征服する過程とされる。

ところが、このような暴力のシンボルが、現実の暴力行為に連鎖することにより、宗教における暴力的要素は現実化する。しかも、戦いが、聖なる次元をもつ衝突と解釈されることにより、暴力に正当化を与える機能がより高度化する場合もある。

いかなる宗教の教えにも、何らかの例外的な部分が内包されており、例えば、仏教活動家には、動物の殺傷の禁戒を含む「アヒムサ」の教義がある。しかし、スリランカのシンハラ活動家の暴力行為は、宗教的な言葉により正当化されている。例えば、「ドゥッカ（苦）の時代においては」暴力を除ける方法がないため、暴力は不可避であるという主張も行なわれている。

仏教の武闘家たちは、現世的な闘争をコスモスの戦争のレベルへと転換することにより、殺生に対する禁戒を迂回できたのである。

ユルゲンスマイヤーは、宗教によって肯定された暴力は、周辺的な位置におかれた人々にとって、とくに魅力的なものであると述べている。それらの人々は、時として殺人の権利までおさめたという認識により、権力の行使において、殺人まで含む暴力の行使を、より容易に行なうようになるのである<sup>32)</sup>。

ところで、現在、欧米や日本においては、一般にキリスト教や仏教のような既成宗教は、衰退もしくは形態の顕著な変化がみられるという傾向にある。そして、これに代って、ニューエイジ運動や新宗教運動が発生しており、少なからぬ影響力を有している。これらの中でも、新新宗教の一つとされるオ

32) ヴァルター・ベンヤミン、野村修編訳『暴力批判論他十篇』岩波文庫、1994年。

ウム真理教は、多くの殺人を含む犯罪事件を起こし、世界的に注目される存在となっている<sup>33)</sup>。

オウム真理教は、前記のごとくシンクレティックな新新宗教であるが、ヒンドゥー・ヨーガの要素や、アヒンサを内包した仏教の要素が最も顕著な集団である。この教団が、いかなる形態によって、宗教の与える暴力の正当化の機能を駆使したか、もしくは、それ以外の要因がいかなる布置において働いたかを、可能なかぎり分析することを試みる。そのために、まず、麻原彰晃とオウム真理教の軌跡に関して言及する。

#### 四 麻原彰晃とオウム真理教の軌跡

麻原彰晃とオウム真理教の歴史に関しては、すでに多くの研究が行なわれているため、以下、重要な論点に関わる部分に関してのみ述べることにする<sup>34)</sup>。

麻原彰晃（本名・松本智津夫）は、1955年3月2日、豊職人の家に四男として生まれた。左目が緑内障で見えず、右目も視力が弱く、小学校の時から県立盲学校に入学し、高等部を卒業するまで在学した。しかし、弱視であったが全盲ではなかった。

麻原は、教科書も点字ではなく、印刷された「黒字」を使っており、成績は、中学部の頃は、理数系が得意科目であり成績は上位にあった。高等部で

33) 島蘭進『精神世界のゆくえー現代世界と新霊性運動』東京堂出版、1996年。  
池上良正・中牧弘充編『情報時代は宗教を変えるか——伝統宗教からオウム真理教まで——』弘文堂、1996年。

島蘭進・石井研士編『消費される〈宗教〉』春秋社、1996年。

島蘭進『現代宗教の可能性ーオウム真理教と暴力ー』岩波書店、1997年。

34) 沼田健哉「オウム真理教の研究ー科学と宗教の関係に関連してー」『桃山学院大学総合研究所紀要』第22巻第1号、96-99頁。

大澤真幸『虚構の時代の果てーオウムと世界最終戦争ー』ちくま新書、1996年。

島蘭進『オウム真理教の軌跡』岩波ブックレット、No.379、1995年。

なお、大澤の研究は、社会学者によって書かれた著書の中では、最も示唆に富むものの一つといえる。

は、成績は中の上程度であり、生徒会長に立候補したが落選したという経験をしている。なお、麻原は、文化祭の演劇で主役となったことがある。十九歳の時、寄宿舍の年間行事の予算を決める自治総会を、大混乱に陥れている。

盲学校卒業後の進路を考えるにあたり、麻原は、医師か政治家になることを志望するようになった。熊本大学医学部を受験したが、試験の最終日に欠席したという。その後、麻原は、政治家を志望するようになった。

盲学校を卒業後麻原は、アルバイトをしながら受験勉強をしていたが、東大受験に失敗した。その後、77年千葉県船橋市内で鍼灸師として開業した。麻原は、一人の予備校生と知り合い、翌78年1月に、結婚した。78年7月、船橋市内で薬局を開設し、82年に薬事法違反で逮捕され、罰金20万円を科せられている。

84年2月に、ヨーガ修行の会を発足させた麻原は、渋谷にヨーガ教室を開き、5月には、株式会社「オウム」を設立し、事業に進出した。しだいに、宗教的世界に興味を持ち出した麻原は、仙道の修行において、82年に、クンドリーニーの覚醒に成功したと述べている。

さらに、より本格的に、宗教を学ぼうとして、高橋信次の著書を読破した。その後、中村元の『原始仏典』と増谷文雄の『阿含教典』を読み、瞑想するに至った。そして、在家のまま解脱に至る方法を探し始め、布施の実践のためもあって、「阿含宗」に入会した。干座行を終了した後、『ヨーガ・スートラ』に出会い、教典を独学で学んでいった。85年2月には、「空中浮揚」を体験するに至ったという。同年、三浦海岸で、神から「神軍を率いる光の命」（アビラツケノミコト）に任命され、シャンバラ王国を築くことを命じられたという。さらに、反ユダヤ主義者、酒井勝軍のハルマゲドン説を知り、その影響を受けた。

86年3月には、『超能力「秘密の開発法」』を刊行し、4月には、「オウム神仙の会」を組織化し、7月には、インドに渡航し、ヒマラヤにて「解脱」の体験を得たという。87年2月、インドのドラムサラに行き、グライラマと会

い、同年「オウム真理教」と改め、麻原は、「尊師」と呼ばれるようになった。

89年8月、「真理党」を設立し、同月、東京都より宗教法人の認証を取得した。その後、上九一色村の土地の購入を始めたが、10月、「オウム真理教被害者の会」が結成された。さらに、11月には、坂本堤弁護士一家が殺害された。

90年2月、衆院選に立候補し、落選した。同年4月、麻原は、「石垣島セミナー」を「日本に天変地異が起きる。今月中に日本は沈没する」という予言をして、開催した。その際、半強制的に出家を勧め、その後、教団は財産管理を徹底させるようになった。10月には、熊本県警が波野村の教団施設に強制捜査のため侵入し、教団幹部が逮捕された。

92年には、モスクワでも教勢が拡大し、急激な信者数の増大がみられた。91年から92年にかけての、全国各地で開催された大学講演会において、近々、ABC兵器による世界最終戦争が起こり、大都市に壊滅的打撃が加えられると話した。93年には、著書や説法の中に、「ハルマゲドン」や「サリン」という言葉が使われるようになり、教団は、武装化への道を歩み始めたとの印象を与えた。

94年1月、元信者の落田耕太郎を殺害し、3月には、説法で、「毒ガス攻撃による被害」を主張し始めた。6月27日には、松本サリン事件が起き、7人が死亡した。9月、宮崎県の旅館経営者が、営利誘拐、拉致監禁で、オウム真理教を告訴した。94年には、オウム真理教による軍事国家を建設する計画のための軍事訓練等が行なわれた。

95年1月1日、読売新聞社が上九一色村でのサリン検出を報道した。2月28日、目黒公証役場事務長の假谷清を拉致、監禁し、後に殺害した。3月17日、麻原彰晃から幹部に対して、正悟師昇格の「尊師通達」が出された。その中には、地下鉄サリン事件の被告も含まれていた。

ついで、3月19日、大阪府警が退会希望の大学生を拉致監禁した容疑で、教団大阪支部を搜索し、信者ら三人を逮捕した。さらに、3月20日午前8時すぎ、地下鉄サリン事件が発生し、大惨事となった。22日、警察庁は、上九

一色村など各地の教団の施設を一斉に搜索した。30日、国松孝次・警察庁長官が、自宅のあるマンションを出た直後に銃撃され、重傷を受けた。23日、南青山の総本部前で、村井秀夫が徐裕行に殺害された。

6月30日、東京地検と東京都は宗教法人法に基づき、オウム真理教の解散を東京地裁に請求した。9月6日、坂本堤弁護士一家の遺体が発見された。10月、オウム真理教の解散命令が東京地方裁判所より出された。さらに、95年12月20日、公安調査庁により、オウム真理教に対する破壊活動防止法による処分に関する弁明の期日及び場所を、96年1月18日、法務省別棟にて行なうことが告示された。その後、多くの裁判ならびにその判決が下されつつも、未だオウム真理教事件の裁判は継続されている。

## 五 オウム真理教の教義ならびに組織と活動の形態

宮坂宥勝は、オウム真理教を混淆宗教の最たるものとして位置づけている<sup>35)</sup>。宮坂は、オウム真理教は、宗教分類によると、ヒンドゥー・ヨーガ瞑想系に属するが、原始仏教、アビダルマ仏教（部派仏教）、インド大乘仏教、極小のチベット仏教、タントラ密教の影響のあるヒンドゥー教、キリスト教の終末史観、すなわち「黙示録」のハルマゲドン、若干の中国思想等の、非体系的な寄せ集めの教義より成っているとする。

宮坂は、市販された刊行物を中心に、その教理を以下のように大別している。(1)原始仏教関係(2)アビダンマ仏教関係(3)大乘仏教関係（オウムでは、マハー・ヤーナとよぶ。）(4)金剛乗関係(5)超能力関係（仏教の神通力の用語と超能力とを併用する。）(6)終末論、ハルマゲドン関係。

麻原の教説の特色は、テラヴァーダ、いわゆる上座部仏教には、ヒーナ・ヤーナ、マハー・ヤーナ、タントラ・ヤーナ、ヴァジラ・ヤーナのすべてが含まれているという見解にも見出すことができる。

35) 沼田健哉「オウム真理教の研究—科学と宗教の関係に関連して—」『桃山学院大学総合研究所紀要』第22巻第1号。

宮坂は、麻原は、超能力を売物にして信者獲得に努めたのであり、宗教的思想を実現する目的で超能力開発を説いたのでないことは、麻原の著作のタイトルや内容からも容易に知ることができると述べている。

そして、終末論、ハルマゲドン関係の出版物に関しては、主としてノストラダムスの予言と、『新約聖書』の「黙示録」の曲解によっていると見しているのは、正当な判断であろう。さらに、仏教の十戒を生活倫理として繰り返し説いている事に注目している。たとえば、不殺生に関しては、以下のように説かれている。「もし、生き物を殺さず、慈しむことができるなら、周りの人があなた方を好きになり、そしてあなた方も心穏やかになり、ね、そして長生きをする。で未来において天界へ生まれ変わるだろう。」(『願望成就の秘法』44頁)

さらに、オウム真理教では、ポワがどう位置づけられているかという教理上の重要な部分は、麻原の説法の以下の部分により知ることができるとする。「すべてを知っていて、生かしておくと思ふと悪業を積み、地獄へ落ちてしまうと。ここで例えば、生命を絶たせた方がいいんだと考え、ポワさせた。この人はいったい何のカルマを積んだことになりますか。殺生ですかと、それとも高い世界へ生まれ変わらせるための善行を積んだことになりますかと。ということになるわけだよね。でもだよ、客観的に見るならば、これは殺生です。客観というのは人間的な客観的な見方をするならば。しかし、ヴァジラヤーナの考え方が背景にあるならば、これは立派なポアです。」(第10話、1989年9月24日、世田谷道場、77頁)

以上のように、宮坂は、オウム真理教の教理を検討した結果、オウム真理教を単純に宗教と規定することはできないが、それでも、日本の仏教者を反省させるだけのものを持っていると見している。その理由は、実質がすでに在家仏教になっている日本の教団仏教に対して、本来の出家とは、布施とは、持戒とは、などというような仏教の最も基本的な、いわばその存立にかかわるような問題を鋭く突き付けたのが、オウム真理教であることもまた事実な

のであるという事による。なお、この指摘は、きわめて重要といえる。

ついで、永沢哲は、オウム真理教のユニークさは、科学と宗教的实践の融合に基づいた文明の方向転換の代案を、生と死の全体にわたる、一つの閉じた「真理」の体系として提示し、かつそれを具体的に、「生真面目に」実現しようとする道を選んだ点にあるとする。

永沢は、オウム真理教における「真理」の結晶化のプロセスにおいて核となったのは、グルとしての麻原と、彼が教えたクンドリー・ヨーガの身体技法を中心とする具体的な修行であったとしている。

永沢は、麻原の『生死を超える』の中に、仏教の十二縁起と解脱に関するきわめてオリジナルな考え方が含まれているとする。麻原は、上座部仏教のなかには、座法と呼吸法の制御によって、クンドリーを覚醒させるという修行法は見当らないという常識を、クンドリー・ヨーガの体験から転倒してしまうが、それは、きわめてオリジナルな思考のあり方を示しているとする。このような点に、新宗教としての積極的な姿勢がうかがわれる。

さらに、仏教で「四念処」と呼ばれる瞑想を、麻原は、サーンキヤ哲学の概念で解釈し、この瞑想により、解脱したと述べている。しかし、永沢は、この瞑想は、根源的な自由と喜びと慈悲という、柔らかい心の状態を生み出すはずのものであるのに、麻原の場合は、ニヒリズムに貫かれていることに疑問を感じるとしている。このニヒリズムこそ、当教団を解体に至らせた要因といえよう。

そのニヒリズムの要因の一つとして、永沢は、麻原は、弟子が急速に増え始めた時に、イニシエーションを多数の弟子に対して行ない、その反作用のため、混乱とエネルギーの低下に陥ったものと推測している。さらに、出家が強調されるにつれ、「成就者」と「凡夫」、「グル」と「普通の人間」の区別が公然と主張されるようになった。そのため、シャクティ・パットの体験は、麻原の意識の中に、深い権威主義と差別と錯誤に色取られた解釈を生んでいくことになった。なお、このシャクティ・パットは、ヨーガの本来的な形態

からは逸脱していた。

そして、オウム真理教は、閉じた「真理」のために、「救済」は「戦争」として理解されるようになり、破滅への道をたどるにいたったと見している。永沢は、オウム真理教においては、麻原の修行体験が従来の固定化した枠を乗り越える事を可能にしたが、同時に、修行や、グルと弟子のあり方が、本来的なあり方から、かけ離れすぎていた事と、ニヒリズムに陥った事が破滅への道をたどった要因であるとは見している。このような見解は、やや好意的なものであるが、内在的理解を試みた例として注目に価する。

ついで、オウム真理教における終末予言に関して考察を行なう<sup>36)</sup>。オウム真理教の世界最終戦争（ハルマゲドン）という言葉は、『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」にその由来が求められる。麻原は、この『ヨハネの黙示録』を、きわめて自己流に解釈しているが、さらに、それは仏教の末法思想の影響をも受けている。

オウム真理教のハルマゲドンは、インド仏教において、最後に成立した密教聖典である、『時輪タントラ』（カーラチャクラ・タントラ）に相当部分依拠しているのである。

それによれば、釈尊は、イスラム教により、仏教が危機に瀕することを予知したため、『時輪』の根本タントラとされる『吉祥最勝本初仏タントラ』を説いた。これを聞いた、シャンバラの国王スチャンドラは、本国に帰り、その教えを説いた。シャンバラとは、ヒンドゥー教のヴィシヌ派が説いた理想郷を指し、ヴィシヌの九番目の権化がゴータマ・ブッダとされており、十番目の権化が、カルキと呼ばれる英雄神である。

『時輪タントラ』においては、総ての民衆を仏教徒にして、カースト制度を廃止する者が、シャンバラの王カルキであるとされ、25代目のカルキが、イスラム教徒との最終戦争に勝って、再び世界に仏教を宣布すると予言され

36) 沼田健哉「終末予言とマインド・コントロールと権威への服従ーオウム真理教事件の社会心理学的分析ー」『桃山学院大学社会学論集』第30巻第1号。

ている。この部分には、仏典における戦争が登場しているのである<sup>37)</sup>。

ところで、噴火は神の怒りであり、人間の悪業が満ちてくると、神は火元素を操って火山の噴火により、部分的にカルマ落としをする。人工的な火を使ってカルマ落としをする場合が、ハルマゲドンである。さらに、救世主がこの世に現われ、超人類が誕生することが暗示されている。麻原は、神の怒りによる大破局を、神を心から信じる超人類のみが乗り越え、新しい世界を築くものと推測している。

ハルマゲドンの後に、ヨーロッパが残るが、ヨーロッパが滅亡した後で超人類が登場してこの世を統治し、昇華し、最終的には、ラトナサンバヴァの世界（宝生界）に、聖なる者たちが到達していくとする。

宇宙は、創造、維持、破壊、虚空というサイクルで展開し、今は虚空の時代である。この時代は、創造→破壊→魂と世界の二分化→創世というサイクルで説明すると、魂の二分化から創世の途中に現われる状態であるという。

人類滅亡のシナリオとは、一時的な享楽にふける魂の持主が破壊され、超人類が現われて彼らが生き残るというものである。神が、大きな戦争の首謀者となる時代は近く、大破局は避けられず、神に帰依して魂の向上を図り超能力を身に付け、神々の陣営の一員として邪と闘うなら、超人類としての幸福は約束されるという。

麻原は、自分がキリストであり、かつノストラダムスが予言した救世主であり、末法におけるマイトレーヤーでもあることは確かであると述べている。さらに、麻原によれば、「武人権頂王」は、ハルマゲドン前後に現われるとされ、地上における宗教戦争は、最終的には、仏教対キリスト教の対決になり、

37) 田中公明『チベット密教』春秋社、1993年、松本史明『チベット仏教哲学』大蔵出版、1997年。

田中公明『超密教時輪タントラ』東方出版、1994年。

岡田明憲『ゾロアスター教—神々への讃歌』平河出版社、1982年。なおオウム真理教には、ゾロアスター教の影響がみられる。

佐竹明『佐竹明聖書講義黙示録の世界』新地書房、1987年。

ハルマゲドンとは、1997年から2003年にかけて激しく起きるとされている。

さらに、地下鉄サリン事件の直前に発売された『日出づる国、災い近し』の中には、阪神大震災は、天災ではなく、地震兵器による攻撃であるという記述がみられる。ついで、1995年1月1日の、オウム真理教ラジオ放送の中で、麻原は、四つの予言の方法をあげている。第1は、他人の予言書を解説するもの。第2は、社会現象を色々な形でデータとして入れ、それを数学的に処理することによって、未来を分析するという技術。第3は、他の現象と、過去の事象との経験的類推から未来を予知する。第4は、神通力によって未来を見るという方法である。

さらに、注目すべき麻原の見解を、『日出づる国、災い近し』の中に収録されている、麻原の講演の中から選択すると、以下のようなものがあげられる。

「第3次世界大戦のもともとの狙いというのは、都会を完全に死滅させること。そして、ある意味での無政府状態をつくること。そして、地球の統一的な政権をつくること。この三段階に計画は分類されている。」(93年6月10日)

「仏教対キリスト教の戦いというのは比喩的な表現ということができます。つまり、仏教対キリスト教を奉じて物欲に支配されている魂たちとの対決になりますよと。この仏教というのは仏教ではなく、この人間の世界が一つのマヤー、幻影であり、その幻影に立脚した、つまり本質的には意識であり、その意識そのものが空であるということに立脚した集団対、物欲の集団の対決が最終的な対決になりますよという意味です。」(94年3月26日)

さらに、『亡国日本の悲しみ』の中には、以下のような内容のものが含まれている。「今回の国家権力による弾圧は、それはちょうど、イエス・キリストを弾圧したユダヤが、その後流浪の民となったように、この日本に大きな災いがふりかかることだろう。」(6-7頁)

以上のような麻原の見解は、多くの示唆に富む内容を含んでおり、宗教に限定された考察のみでは、その客観性に富む分析は、困難といえよう。その

全体的考察は、最後に行なうとして、特に科学と宗教の双方に関連した内容が注目に価する<sup>38)</sup>。

佐倉統は、宗教の歴史とは、異端と他者を殺戮する、すなわち、「他者」を排除する歴史であったと述べている。宗教の重要な機能が、共同体の精神的結束を高めることにあるために、そのような結果が生じるのは当然のことであり、この点において、オウム真理教の行為は、宗教的な行為と見しうると述べている。これは、重要な指摘といえよう。しかし、宗教のもつ悪い面が「すべてそろってしまった」点が、オウム真理教の場合、特殊であるとする。したがって、なぜに出そろったかが重要な問題となるといえよう。その問題に関しては、後に考察を加える。

さらに、佐倉は、最近まで、科学と神秘は一体であり、自然科学が独立し、科学と宗教が分離し、対立するように広く扱われたしたのは、19世紀以降顕著となった現象であると述べている。オウム真理教は、宗教が科学を抱え込むことはもはやありえないと考えられるのに、宗教と科学の地位の「逆転」をねらったが故に、退行現象と見すべきであるというのである。しかし、単純に逆転をねらったと考えるのは、適切とはいいがたい。

さらに、佐倉は、科学教育とは、人間に本来備わっているオカルトへの興味を、科学的な解明への原動力に転化することに外ならないとする。しかし、専門家は、非社会的な閉鎖集団に閉じこもり、責任の大きさを自覚せず、一般市民は、専門家の暴走を許容する。オウム真理教事件は、科学が社会的な存在であることを忘れないことが大切であるにもかかわらず、それを忘れたときの恐ろしさを、示した事件として位置づけているのは、正当な見解であ

38) 沼田健哉「オウム真理教の研究－科学と宗教の関連に関係して－」『桃山学院大学総合研究所紀要』第22巻第1号。

麻原彰晃『日出づる国、災い近し』オオム出版、1995年。

麻原彰晃『亡国日本の悲しみ』オオム出版、1995年。

『仏教別冊No.8, オウム真理教事件－宗教者・科学者・哲学者からの発言－』法蔵館、1996年。当書は、オウム真理教に関する文献の中でも最も体系的なものの一つといえよう。

る。

さらに、鬼頭秀一は、オウム真理教は、宗教が積極的に科学技術を取り込んだ典型的な例であり、その点では注目すべきものがあるとする。しかし、オウム真理教の科学者たちは、従来の近代科学の枠組を越えようとしつつも、科学の制度的なあり方に対して、思想的に無防備であったが故に、容易に、ハルマゲドンに対する科学動員のための新しい制度に絡み取られていったと分析している。これは、科学社会学的分析の必要性を指摘しているといえよう。社会科学視点の不足が、オウム真理教に悲劇的結果をもたらした要因といえる。

ところで、オウム真理教の出版物の中には、以下のような注目すべき内容が含まれている。「宗教は科学である—これはオウム真理教の基本的スタンスの一つである。そして、科学である以上、一つ一つの教義についても科学的な実証をなさなければならないのはいうまでもなく、それが今回の“解脱”を実証するアンダーグラウンド・サマディの意味合いでもある。……サキャ神賢（釈迦牟尼）の原始仏教、そして偉大な成就者たちによって伝えられた原始ヨーガの教えしかり……<sup>39)</sup>」

この考えは、幸福の科学、特に教団の初期の形態に類似しており、そのような立場を標榜する新宗教もしくはカルトが、洋の東西を問わず少なからず出現する社会状況と、それらの教団出現の意味合いを、科学社会学的立場からも考察する必要があるといえる<sup>40)</sup>。

39) オウム出版広報編集部編『ザ・サマディ PART II——実録・アンダーグラウンド・サマディ1991』株式会社オウム、1992年70頁。

40) 宗教学の立場からのものとしては、井門富二夫『カルトの諸相—キリスト教の場合』岩波書店、1997年。ならびに阿部義哉『現代宗教の反近代性—カルトと原理主義—』玉川大学出版部、1996年が代表的な研究としてあげられる。

社会学者の研究としては、沼田健哉『宗教と科学のネオパラダイム—新新宗教を中心として—』創元社、1995年。見田宗介編『〈聖なるもの呪われたもの〉の社会学』岩波書店、1996年。

Robert N. Bellah, Phillip E. Hammond., Varieties of Civil Religion, Harper & Row, Publishers, San Francisco, 1980.

ところで、これまでは、主として自然科学とオウム真理教の関連について言及してきたが、社会科学に関しても一定程度の試みがなされている。中でも、早川紀代秀は、『市民ユートピアの原理〔上〕—ルソーから真理へ—』という著作の中で、ルソーの『社会契約論』を素材としつつ論を展開している。早川は、民主主義社会が終焉するという危機的状況下にあるという認識のもとに、民主主義とは何かという問題を問い直し、ルソーが提示しようと試みた市民ユートピアとは、いかなるものかを明らかにしようとしている<sup>41)</sup>。

そして、オウム真理教の世界観とルソーの理論とを対比している。結論の部分では、人間観、文明観、自由、平等、愛、統治原理、全面譲渡による社会契約、一般意志、充足度を得る方法、欲望、公共の福祉、多数決の前提、自己利益、法、立法者等において、現代社会の現状と、ルソーの理念とオウム真理教の掲げる目標とを対比して考察している。若干注目すべき部分が散在するが、社会科学的視点からは、高レベルのものとは見しにくい。

このように、早川紀代秀の考察は、未完に終わっており、理系の出身のためもあったか、未成熟な部分が多い。これに対して、青山吉伸は、多くの『理想社会』シリーズを執筆している。青山によれば、理想社会の目的とは、平和で豊かで自由で安らぎに満ちた社会を実現することである。しかし、その努力の多くは失敗し、理想郷は夢のまま未完であったのが人類の歴史である。

そこへ登場した、マルクス、エンゲルスによる共産主義思想は、科学的な

---

Peter L. Berger, *The Social Reality of Religion*, Penguin University Books, 1973.

CHARLES Y. GLOCK and ROBERT N. BELLAH ed, *THE NEW RELIGIOUS CONSCIOUSNESS*, UNIVERSITY OF CALIFORNIA PRESS, Ltd, 1976.

社会心理学者の研究としては、金児曉嗣『日本人の宗教性—オカゲとタタリ—の社会心理学—』新曜社; 1997年。

41) Rousseau, *LE CONTRAT SOCIAL*, 1762.

ルソー、桑原武夫・前川貞次郎訳『社会契約論』岩波文庫、1954年。

作田啓一『ジャン—ジャック・ルソー——市民と個人——』人文書院、1980年においては鋭利な分析が展開されている。

ものとして、資本主義社会の生み出す非人間的な矛盾を一掃し、人類の悲願を達成できるという、信仰にも似た位置を人々の胸に占めていた思想であった。ところが、世紀末の現在、共産主義国で発生した変動により、共産主義は、ユートピア思想としての機能をほとんど失った。

人類に永遠の自由と幸福をもたらし、豊かで乳と蜜が流れる安らぎの社会を実現するという期待は、幻想にすぎなかったのだろうか。このような疑問に対して、人類の叡智とも見しうる最高の真理である、仏教、ヨーガの視点から、明確な解答を指し示す。共産主義の長所を学び、短所を明らかにしながら、精神と物質、さらには、宇宙のすべてを包含する真理の法則により、矛盾を科学的に解決していくことを目指す。

以上のような目的のために、『共産党宣言』、『空想から科学へ』、『資本論』という、マルクス主義の代表的古典を素材として、なぜ、人類は理想社会を形成することができなかったかという問題の要因を分析している。そして、それに代わるものとして、オウム真理教によって提示された世界観、社会観によって、社会改革を行なおうとしている。したがって、それが、結局、失敗に終わった要因は、教団内における構成員の役割とも関連させながら慎重な考察の対象とするに価するといえよう。もちろん、青山の考察にも多くの不完全な部分があるのは、いうまでもないことである。しかし、一方では注目すべき問題提起が随所にうかがわれる。

ついで、組織と活動の形態をみることにする。オウム真理教は、一種の擬似国家の形態をとっていたが、その中央組織は、日本の内閣や中央官庁を模倣していた。教団幹部の構成員は、若年である事と高学歴者が多い事で知られており、これらの幹部は、いずれも出家者であった。そして、それぞれ、最終解脱者とされていたため在家と同じ生活も可能な麻原を除いて、出家者としての生活を行なう人々はいずれかのステージに定められていた。

このステージとは、「心の成就・霊性の高さ」の度合を示すものであり、いかえれば、「いかに心が浄化され、心が強く、他の多くの生命体を救済する

ことに専心しているか」という度合を示すものと、教団内では規定されていた。正大師（大乘のヨーガ成就者）は5人、正悟師（マハームドラーの成就者）は、10人前後だったとされているが、時期によって若干の差異がある。さらに、師（クンドリニー・ヨーガの成就者）、師補、サマナ長（ホーリ・ネームが授与される意）、サマナ、サマナ見習いから、ステージの階層は構成されていた。

オウム真理教の修行者は、このように、大きく二つに分けられている。一方は、通常の世界生活を送りながら教学と修行を続ける在家修行者であり、もう一方は、教団施設で暮らし、僧侶として修行を続ける修行者である出家修行者である。在家と出家の比率は、約10対1、通称として在家修行者を信徒、出家修行者をサマナと呼んでいる。サマナは、信徒の修行目的、修行進度に応じて適切な指導をし、信徒は、自分のペースに応じて課題をこなしていた。

在家修行の日々の実践の目的としては、大乘仏教の「六つの徹底」と呼ばれる修行法がある。しかし、在家修行とは、さまざまな煩悩の中に身を置きながら、真理を実践する道であるため、解脱、悟りという絶対的な自由、幸福、歓喜、叡智を望む者には、出家修行が推奨されていた。

出家主義者には、十の戒律と「聖なる十段階の道」の修行が日々の実践項目となる。出家者には、それぞれの能力や資質に応じてのワークが与えられるが、それは、奉仕修行としての功德を積む機会であると共に、教義の実践の場としても重要な意味を持つとされる。サマナも、それぞれ与えられたワークを行ないながら、同時に教学、行法、瞑想などの修行を進めていくことになっている。

以上のように、多彩な活動が展開されており、種々の信者に対する対応も行なわれていた。高いステージに達するためには、出家をする方が良いとされていたが、それは、しだいに奨励から強制へと変化していった。後期における出家者の生活環境は、非人間的な冷たい雰囲気であったと、多くの信者

が証言している。そこでは、クー・デタの準備まで行なわれていた。

## 六 結 び

オウム真理教は、多くの戦争に関する記述を含む出版物を数多く出版したことが、教団の特色の一つとしてあげられる。宗教による暴力の聖化、ならびに正当化は、古来から数多くみられた現象であるが、当教団は、その現代的形態を典型的に表わしているといえよう。

さらに、教義の次元とは異なり、現実には大量の殺人者ならびに被殺人者を生ぜしめた要因は、慎重な考察の対象とするに価する。また、教団内における暴力の行使があり、それがしだいに教団外の人物へと拡大し、最終的には、地下鉄サリン事件まで引き起こすに至った要因が分析されねばならない。

教団内における、麻原を中心とした幹部による権力と支配の維持のためには、暴力と宗教的権威の双方が採用された。しかし、このような構造分析のみではなく、教団が変容していく過程を歴史的パースペクティブのもとに分析する必要がある。

ところで、多くの研究者が指摘しているのは、世俗社会においては、麻原よりもはるかに上位に位置づけられている、優秀な人材が数多く参集した事である。さらに、麻原の単独の指導のもとに、あれだけの大惨事を生じさせる事を可能にした程の組織を形成することが、はたして可能であったのかという疑問を提示する研究者も少なからずいる。

オウム真理教事件をみると、きわめて正確な情報ならびに巧みな操作と、不正確な情報と稚拙な行動とが混在している。その要因としては、まず教団内にきわめて優能な組織の一員が何らかの関与をするために参入しながら、外部の組織と連携しつつ行動したという可能性もあげることができる。

現代社会は、グローバル化した情報ネットワーク社会と言われているが、オウム真理教は、パソコン通信をも行なっていたことが知られている<sup>42)</sup>。そ

42) オウム真理教とニューメディアの関係に関しては、島藺進・石井研士編『消費さ

の事実からも、当教団が、何らかの形態において、世界的に影響力を有する組織の中のいくつかと接点を持っていた、もしくは持つことを余儀無くされたという可能性も否定できないといえよう。

さらに、湾岸戦争は、情報戦と言われているが、オウム真理教が行なった行動に関するマスコミ等の報道も情報操作があった可能性もある。そのような前提に立って、大胆な推測を行なうと、オウム真理教事件において、最も有利な結果を得たのは、最も大きな影響力をもった組織であり、最も不利な結果を招いたのは、社会的影響力の少ない組織であったという想定も可能である。

さらに、オウム真理教は、一種の擬似国家を形成したが、国家として想定した場合、麻原は、法皇にして内閣総理大臣にも比すべき職位にあり、幹部の多くは、各省庁の大臣もしくは長官に相当する。しかし、国家としてのオウム真理教の脆弱性は、情報を独占する、高度に発達した官僚組織が不在、もしくは未発達であったことにも帰せる部分がある。

さらに、教団としての組織形態をみると、カリスマの担い手である麻原は、純粋なカリスマと日常的なカリスマを使い分けることにより、その権力を強化し維持しようとした。教団の中核以外の一般の信者に対しては、統制が断続的で疎遠であったが故に、純粋な宗教的カリスマがより強く機能し、教団の維持に順機能的に作用した。このような使い分けは、比較的成功したといえよう。

よりミクロな次元から考察すると、麻原は、種々の剥奪体験から生じた、一種のニヒリズムの担い手である人神と自己を規定するに至った。ペシミズムの色彩の濃いニヒリズムに陥った麻原は、ヴェーバーの定義しているよう

---

れる〈宗教〉』春秋社、1996年参照のこと。

なお、メディア環境に関する代表的文献としては、金澤寛太郎『現代のメディア環境—通信空間と放送空間の変容—』学文社。三上俊治『改訂版情報環境とニューメディア』学文社。吉見俊哉『メディア時代の文化社会学』新曜社、1994年等があげられる。

に、「死の意味とその聖化に関する戦士のみに固有な感情を賦与する」戦争を企てる、死の共同体を組織化しようとするに至った。

さらに、集団外に敵を想定する事は、集団維持のための常道であるため、多くの敵が、教団の内外に存在する事が情報として共有されるような操作が行なわれた。最後に、宗教と科学の関係という視点から考察すると、J・M・インガーの分類の四つの論理的可能性の中の一つである、宗教と科学は調和的あるいは究極的には同一のものと考えられるという部分に、該当もしくは、近いといえる<sup>43)</sup>。

しかし、その科学は自然科学が中心であり、麻原と同様、何らかの剥奪体験から生じたルサンチマンを有する者が多かった、理系の科学者は、社会科学的もしくは人文科学的素養が不十分であったために、より容易にオウム真理教の内部に吸収され、犯罪行為を遂行するようになるに至った。

オウム真理教は、新たな科学を形成しようと企てていたが、結果としては、既存のテクノロジーによる殺戮に終わった。しかし、素材としては、興味深いものが散在しており、もし人類が共同して取り組むなら、なにがしかの新たな展望への手がかりを提示しうる部分を含んでいた。

---

43) J.Milton Yinger, THE SCIENTIFIC STUDY OF RELIGION, Macmillan Publishing Co., Inc, 1970. J.M.インガー, 金井新二訳『宗教社会学Ⅰ, 宗教社会学の方法』ヨルダン社, 1989年。このような見解が、オウム真理教が多くの社会的問題を生ぜしめるに至った一因をなしている。

A Consideration on the  
Relation about Dominance and  
Violence in Religious Group:  
With Special Reference to  
Aum Shinrikyo

Kenya Numata

The purpose of this paper is analyzing the relation about dominance and violence in religious group. We have seen many violence in Gulf War and Aum Shinrikyo Case. After that, I realize one of the most important function of religion is to legitimize the power. Both power and dominance are necessary to the maintenance of group. And, I realize that another function of religion is to authorize the violence. In this paper, I analyze the function of religion with special reference to Aum Shinrikyo.